The University of Osaka
Institutional Knowledge Archive

Title	芥川龍之介「煙管」を読み直す ： 貨幣政策を視座として
Author(s)	水野, 亜紀子
Citation	日本語・日本文化. 2021, 48, p. 35-47
Version Type	VoR
URL	https://doi.org/10.18910/79312
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

The University of Osaka

〈研究論文〉

芥川龍之介「煙管」を読み直す
―貨幣政策を視座として―

水野　亜紀子

はじめに

芥川の歴史小説は、作品の主題が検討される場合、人間心理を描くところに着目して論じられる傾向にある。それは、森鷗外「歴史其儘と歴史離れ」(『心の花』1915 年 1 月）で言うところの「歴史離れ」の形式で書かれていることと関係が深い。先行研究が指摘するように[1)]、マルクス主義文学の考え方からすれば、歴史小説を書くためには歴史を他者として受け入れることが重要となるが、芥川の歴史小説には他者性が欠如している。芥川は歴史を素材としてのみ捉え、そこに心理的な主題をのせていくのである。そのため、芥川の歴史小説が研究対象となる場合、心理的な主題に着目されていくことは自然な流れであると言える。

「煙管」(『新小説』1916 年 11 月）は、初期の頃に創作された歴史小説であるが、これも例外ではない。先行研究は「煙管」が人間心理を主題とするものとして論じる[2)]。もちろん、「煙管」は登場人物の心理の変化が順を追って説明されていくところに特徴があり、その作りを無視することはできない。しかしそれだけであろうか。本論では、「煙管」が、発表された当時の社会的な出来事を多分に意識して書かれたものであり、そこに政治的意見が込められている可能性を指摘したい。「煙管」がそのように捉えられることは、これまでにはなかった。しかし、作中に使用される語や、構図に着目すること、その上であらためて作品発表当時の時代背景を参照することを通して、本作が当時の世界情勢とそれに対する日本の動きを視野に入れて創作されたものである可能性を読み取りたいと考える。

芥川は政治的な問題に対して距離を取る作家であることで知られる。関口安義は実証的な研究を通してそれに反駁する。また「将軍」（『改造』1922 年 1 月）「金将軍」（『新小説』1924 年 2 月）をはじめとする個々の作品を取り上げて、芥川の歴史認識について考察し、芥川作品と社会との関係について新たな視点を提示する[3)]。本論は「煙管」を例に取ることで、より早い時期の作品からすでに政治性を帯びるものがあるのではないかという仮説に取り組むものである。芥川研究に新たな視点を提示することを目指す。

1　経済、金（ゴールド）、好景気

「煙管」が、当時の社会的な出来事を多分に意識して書かれた作品ではないかと考える理由は、「煙管」作中に見られる特徴的な次の三つの要素が、第一次世界大戦を背景とする当時の様子を思い起こさせるからである。三つの要素とはすなわち、経済、金（ゴールド）、好景気である。三つの要素が作中にどのようにあらわれるかを確認するところから考察を始めたい。

まずは経済についてである。本作は実は経済の問題を中心としており、それは使用される語にあらわれている。そのことが最もよく分かる次の箇所を見たい。

> 加州一藩の経済にとつては、勿論、金無垢の煙管一本の費用位は、何でもない。が、賀節朔望二十八日の登城の度に、必、それを一本づゝ、坊主たちにとられるとなると、容易ならない支出である。或は、その為に運上を増して煙管の入目を償ふやうな事が、起らないとも限らない。さうなつては、大変である―三人の忠義の侍は、皆云ひ合せたやうに、それを未然に惧れた。

「経済」「費用」「支出」「運上」「入目」など、経済に関連する語がいくつも用いられていることが分かるだろう。「運上」は税金、「入目」は出費のことである。参勤交代にも、金の煙管にも、多額の「費用」がかかるため、役人らは「藩の経済」を心配して相談を続けていくのである。この作品は、藩が経済的な問題を乗り切る経緯を描くものである。

次に、金（ゴールド）についてである。「煙管」には、加賀藩の象徴とされる金で作られた煙管が登場するが、これは藩の象徴を金で担保しているという点で本論では重要な意味を持つと考える。その金のイメージが、作中のあちこちで強調されているのである。加賀藩が金箔で有名なことは言うまでもないが、「金無垢の煙管」や「西王母を描いた金襖」が登場する。他に、宗俊の状況を説明するところに「外の坊主共と一しよになつて、同じ煙管の跡を、追ひかけて歩くには、余りに、「金箔」がつきすぎてゐる」などの言葉が用いられている。単語を数えれば、「金無垢」は二十回、「金襖」は四回、「金」は四回、「金箔」は一回登場する。それらの語によって、作品全体が金のイメージで覆われているのである。

そして最後は、好景気についてである。ここでは作中の時間が好景気の時期に設定されていることを指摘したい。「煙管」には前田斉広や河内山宗俊が登場することから、作中の時間は十一代将軍徳川家斉治世の文化文政時代であることが分かる。ちなみに、登場人物「斉広」は、歴史上の人物として考えれば正しくは「なりなが」であるが、「煙管」が『新小説』に掲載された当時から、「斉広」には「なりひろ」とルビが振られていたことを確認することができる。ともあれ、作品の描写は創作であるものの、実在の人物に材を取ると考えて問題ないだろう[4)]。この時期は、江戸を中心とした町人文化が最盛期を迎えていた。文化が栄えるということは、庶民にも経済的余裕があり、景気は決して悪くはなかったはずである。「煙管」はそのような時代の中で、裕福であったとしても藩の財政を問題としている加賀藩の様子を描いている。

ここまで、「煙管」に見られる三つの要素と、それらが作中にどのようにあらわれているかを確認した。この三つの要素、経済、金（ゴールド）、好景気を手がかりとして、「煙管」が発表された当時の日本を振り返ると、第一次世界大戦下における貨幣制度としての金本位制と、「大戦景気」と呼ばれる日本の好景気が想起される[5)]。

1914年7月、第一次世界大戦が始まると、ロシア、フランス、ドイツ、オーストリア、イタリア（のちにイギリス）は自国の財政を守るために金本位制を離脱する。金の保有量に関係なく紙幣を発行できるようにして、戦費を賄う必要が

あったからである。「煙管」が書かれた 1916 年当時、まだ日本は好景気に浮かれており、貨幣政策について何も手を打っていない状況であった[6)]。1917 年 4 月に参戦したアメリカが、同年 9 月に金本位制を停止すると、その後それに追随する形で日本も金本位制を停止する。そのような流れがあった。

こうして考えてみると、「煙管」は、日本の政策に対して何らかの意見を持つ芥川により、寓話として書かれている可能性はないだろうか。もしそうであれば、「煙管」にはどのような政治的意見が読み取れるのであろうか。以下、作中の設定をさらにくわしく見ることで、この仮説について述べていきたい。より具体的に言えば、登場人物「三人の役人」への着目の重要性を説くことを通してこれを論じていくことになる。

2　煙管をめぐる三つの立場

「煙管」には、煙管をめぐって「斉広」、「宗俊」と「坊主たち」、「三人の役人」という三つの立場が用意されている。それぞれの登場人物が煙管を本質的にどのように考えるか、それを掴むことが本作を理解するために必要であると考えるため、ここではそれぞれがどのように煙管を捉えているかを、本文の言葉から整理する。

まずは「斉広」についてである。「斉広」こと加州石川郡金沢城の城主・前田斉広は、金の煙管を加賀藩の象徴だと思っている。彼にとって煙管は権力の象徴である。それは「彼の得意は決して、煙管そのものを、どんな意味でゞも、愛翫したからではない」「つまり、彼は、加州百万石が金無垢の煙管になつて、どこへでも、持つて行けるのが、得意だつた――と云つても、差支ない」とある通りである。「彼が煙管を得意にするのは、前にも断つたやうに、煙管そのものを、愛翫するからではない。実は、煙管の形をしてゐる、百万石が自慢なのである」ともある。しかし一方で、斉広が煙管そのものに対して無頓着であることも明らかにされている。「金無垢の煙管にさへ、愛着のなかつた斉広が、銀の煙管をくれてやるのに、未練のあるべき筈はない」という箇所がある。役人らが真鍮の煙管を金であると偽ったことにも気付いていなかった。煙管の材質すら分からないのである。あくまで、金の煙管は「斉広」にとって権力の象徴でしかないのであ

る。

次に、「宗俊」と「坊主たち」についてである。「宗俊」と「坊主たち」というのは、御数寄屋坊主の河内山宗俊とお坊主たちのことである。彼らは、金の煙管を金銭的に価値があるものだと捉えている。そのことは坊主らの会話に見られる「同じ道具でも、あゝ云ふ物は、つぶしが利きやす」「質に置いたら、何両貸す事かの」という言葉から分かる。また、「宗俊」は「金無垢ならばこそ、貰ふんだ。真鍮の駄六を拝領に出る奴が何処にある」と発言していた。「駄六」は駄六張の略で、粗末な作りの煙管のことを指す。金の煙管は金銭的に見て価値があるから手に入れたいと思うし、何本でも手に入れたいと考えている。「宗俊」は金の煙管だと思ったものが、手に取ってみると実は真鍮製であったことが分かると、坊主の一人である「了哲」の顔へ抛りつける。「了哲」も、その煙管を「畳の上へ抛り出すと、白足袋の足を上げて、この上を大仰に踏みつける真似」をする。彼らは殿から拝領した物品を無条件に大切にしたいという考えは持っていない。「宗俊」と「坊主たち」は、金や銀で出来ているからこそ煙管には価値があると考え、真鍮製なら何の価値もないと考えていることが分かる。

そして最後に「三人の役人」の立場についてである。「三人の役人」とは「御用部屋の山崎勘左衛門」「御納戸掛の岩田内蔵之助」「御勝手方の上木九郎右衛門」である。作中では三人を指す時に「三人の忠臣」とも表現される。藩の財政を任されていたと思われる三人は、金の煙管を財政的な支出と考えている。「賀節朔望二十八日の登城の度」に金の煙管を一本ずつ坊主たちにとられるとなると、その出費は膨大なものとなる。煙管を作らせるための支出が大きければ、それを補うために税金を増やすような事態となりかねない。それを危惧していた。三人は藩の財政を守ることを一番に考え、先回りして話し合っている。煙管を金製から銀製に変えることにより何とか支出を抑えようとしたが、当てが外れてさらに支出が増えてしまうと、今度は真鍮に変えようとした。その矢先、殿から金の煙管に戻すように命ぜられたが、結果的に三人は殿の体面よりも藩の財政を優先させている。斉広を欺いたのである。そこからは「三人の役人」が何としてでも加賀藩の財政を守りたいと考えていたことが分かる。

ここまで、煙管をめぐって三つの立場が作中に示されることを確認した。先行

研究は「斉広」の心理変化を軸として作品を論じる。すなわち、「斉広」が「煙管を得意にする」ところから「急に今まで感じてゐた、百万石の勢力が、この金無垢の煙管の先から出る煙の如く、多愛なく消えてゆくやうな気がした」と思うようになるまでの心理変化に着目するのである。これに対し本論では、他でもない「三人の役人」が作品を展開させていると考え、「三人の役人」の行為に着目する。次の章では、「三人の役人」の行為を重視する理由を述べる。その上で「三人の役人」の行為とは本質的に何であったかを考える。

3　暗君「斉広」、形無し「宗俊」

「三人の役人」の行為に着目する一つ目の理由は、「煙管」冒頭近く、前田家の席次が御三家の次であると書かれていることと深く関わる。

> 前田家は、幕府の制度によると、五世、加賀守綱紀以来、大廊下詰で、席次は、世々尾紀水三家の次を占めてゐる。

ここには「綱紀以来」とも書かれている。前田綱紀は名君として有名な人物である。前田家の統治が成功したのは、綱紀が優秀な家臣を育てて大事にしたからである。そのこともあって外様大名であっても時代の波を乗り越えることができた。十村制度を整えたことや、好学の人としても有名であった。綱紀の代に学問・文芸の興隆が顕著であったという[7]。その一方で、斉広は暗君として有名であった[8]。「斉広」は作中でも十分に暗君として描かれている。虚栄心が強く、気前が良いため、後先考えずに高価なものを人にあげてしまう。坊主らに金の煙管をせがまれるようになって、藩の財政をおびやかされることとなった。真鍮の煙管を金の煙管であると家臣から欺かれても、気づかないほど暗愚である。

作中にはっきりと書かれているわけではないが、明らかに本作には綱紀と斉広の対比が用意されている。そうでなければ冒頭近くに「五世、加賀守綱紀以来、大廊下詰で、席次は、世々尾紀水三家の次を占めてゐる」とわざわざ書かれないであろう。表立って書かれてはいないが、本作には優秀な家臣さえいれば安泰であるという思想がほのめかされている。そのため、「三人の役人」の役回りを重

視するのである。

二つ目の理由は、「三人の役人」の行為が、作中で強調された形で提示されるからである。作中、役人らにとってかなり厳しい状況が描かれる。「一時、真鍮の煙管を金と偽つて、斉広を欺いた三人の忠臣は、評議の末、再、住吉屋七兵衛に命じて、金無垢の煙管を調製させた」とあるように、「三人の役人」は殿を欺かなければならない状況に置かれてしまう。そしておそらく命がけと思われる対応を行った。つまり、実際に欺くのである。しかし、「三人の役人」が斉広を欺いた事実は、ただちに読者に知らされない書かれ方となっている。おそらくそれは敢えてそのように書かれているのであろう。斉広が騙されていることは、内容を読み進めていくうちに明らかとなり、それによって「三人の役人」の判断が結果的に強調される形となっている。また、これをふまえて最後の箇所も見たい。

> 古老の伝へる所によると、前田家では斉広以後、斉泰も、慶寧も、煙管は皆真鍮のものを用ひたさうである。事によると、これは、金無垢の煙管に懲りた斉広が、子孫に遺誡でも垂れた結果かも知れない。

末尾の後日談のところには、「斉広」の気持ちは明記されない。語り手による推測が示されて終わる。深読みすれば、傍線部は語り手の皮肉ともとれる。なぜなら、暗君が遺誡を垂れるわけがないからである。天保の改革によって、煙管に金銀を用いることが厳禁されたという経緯があるため、「斉広」が遺誡を垂れなくても煙管に金銀は用いられなくなるに違いない。本作は、「斉広」が暗君としてあればあるほど、藩を守る「三人の役人」の存在が際立つ仕掛けになっている。ちなみに、「三人の役人」の名前には、実在の人物のものが利用されている。芥川は「三人の役人」を適当に名付けているわけではなかったことも付け加えておきたい[9)]。

最後に三つ目の理由を述べる。本作の登場人物のうち、表面的に見れば河内山宗俊が最も主人公として設定されそうな存在に見える。歌舞伎であれば、弱きを助け強きを挫く人物として登場するところであろう。しかし「宗俊」もまた、「三人の役人」の計画に騙される存在であり、主人公としては描かれない。実は

「煙管」には、歌舞伎の一場面を彷彿とさせる箇所もあった。

> 河内山宗俊は、外の坊主共が先を争つて、斉広の銀の煙管を貰ひにゆくのを、傍痛く眺めてゐた、殊に、了哲が、八朔の登城の節か何かに、一本貰つて、嬉しがつてゐた時なぞは、持前の癇高い声で、頭から「莫迦め」をあびせかけた程である。

「莫迦め」は歌舞伎で宗俊が花道を使って引っ込む時に発する決め台詞である。しかし、本作の「宗俊」は意図的に歌舞伎のイメージからずらされているのである。「宗俊」と「斉広」の三回にわたるやりとりを見ると、本作が「宗俊」の形無しの様子を描こうとしていることが分かるので、ここに確認しておきたい。

一回目は、「斉広」の立場や心理を巧みに利用して、「宗俊」はまんまと金無垢の煙管を巻き上げる。二回目は、「斉広」が金無垢の煙管で悠々と煙草を吸っているのを見た宗俊が仲間にそれを告げると「真鍮だらう」と返答があった。「宗俊」は普段からずる賢い人間を相手にしているので、「斉広」を買いかぶって「百万石の殿様が、真鍮の煙管を黙つて持つてゐる筈がねえ」と言い、煙管を再びもらいに行く。しかし、金も真鍮も区別のつかない「斉広」は、真鍮の煙管を持っていた。それを拝領した「宗俊」は、一杯食わされたと思い、怒りがおさまらない。ここまでで「宗俊」の一勝一敗といったところか。三回目は、「斉広」の方から「宗俊」に「煙管をとらさうか」と声をかけるが、「宗俊」は二度まで翻弄されてはたまらないと、鋭い口調で断る。しかし拝領し損ねた煙管は実は金製であった。こうしてみると、「三人の役人」の計画に翻弄される一人となった「宗俊」は、主役から役回りがずらされていると考えるべきである。「天保六歌仙」の中の一人も形無しという結果となっている。

ここまで、「三人の役人」に着目する理由について述べたが、「三人の役人」の行為とは、本質的に何であったか。「斉広」が自分の虚栄心を満たすことばかり考えていた時、「三人の役人」はその裏で、金の煙管を財政的な支出と捉え、銀製にすることで支出を抑えようとした。銀製にした途端、思いがけずさらに支出が増えたので、銀製から真鍮製に変えた。「三人の役人」は、「斉広」に黙って、

金の煙管（価値のあるもの）の代わりに真鍮の煙管（価値のないもの）を作らせたのである。つまり、煙管は藩の象徴であるが、煙管の材料の価値を下げることで、財政を救ったのである。

本論では、「煙管」における「三人の役人」の存在を重視する。そしてこの作品を〈煙管は加賀藩の象徴であるが、「三人の役人」がその材料の価値を下げることで、藩の財政を救った話〉であると捉え直す。ここで、いよいよ先に投げかけた仮説に話を進めたい。「煙管」が、1916年当時の日本の政策に対して何らかの意見を持つ芥川によって、寓話として書かれている可能性を考えた場合、「煙管」からはどのような政治的意見が読み取れるのであろうか。次章では時代背景と照らし合わせながら、これについて考える。

4　政策への批判

「煙管」を、作品発表当時の時代背景との関わりから捉えた場合、そこにはどのような政治的意見を読み取ることができるのであろうか。私見を端的に述べると、作中の「三人の役人」の行為、すなわち、〈煙管が加賀藩の象徴であることを理解しながら、煙管の材料を金・銀という価値のあるものから、真鍮という価値のないものに変えることによって、藩の財政を守る行為〉は、第一次世界大戦下で欧州の主要国が戦争のために金本位制を中断したことと、似通っていないだろうか。「三人の役人」の行為を描くところに政治的意見が仮託されていると考えるのである。

「煙管」が発表された当時、日本は「大戦景気」のただ中で、好景気に浮かれていた。日本政府は好景気にあぐらをかいて、貨幣政策については何の手も打っていなかった。日本の戦費調達については、国民には詳細は知らされないままであったが、果たして何の問題もなかったのであろうか。戦場の中心となっている欧州主要国はどのようにしていたかというと、特筆すべきは、金本位制から離脱するという貨幣政策を行っていたということである。戦争によって膨らんだ対外債務の支払いのために、金（ゴールド）が必要となると、通貨との兌換を停止せざるを得なくなった。そこで欧州主要国は金本位制を中断して、通貨の発行量を中央銀行が調整できるようにした。金本位制のもとでは、通貨発行量はその国の

金（ゴールド）の保有量によって制限させてしまうが、金本位制を離脱すれば、保有量にかかわらず通貨を発行できるので、戦費を賄うことができた。欧州の主要国は国を象徴する通貨から金（ゴールド）の裏付けを取り去ることによって、国の財政を守ったのである。この動きは、「煙管」中の「三人の役人」が、加賀百万石の象徴ともいえる金の煙管を真鍮製に変えて藩の財政を守った行為と、一脈通ずるものがある。そのように見ると、まだ日本が金本位制を中断せずそのまま続けていたときに執筆された、1916 年発表の「煙管」には、第一次世界大戦中の日本が「三人の役人」のごとく対応しなかったことへの不信感が読み取れるのではないか。

欧州主要国が、貨幣政策によって戦時の財政を何とか乗り切ろうとしていた時、日本では、兌換紙幣である日本銀行券がいつでも金（ゴールド）と交換できる状態であった。このまま金本位制を続けていれば、外国人の投資家が金（ゴールド）を求めて日本銀行に殺到し、日本の金（ゴールド）の保有量が激減してしまうのではないか。そうした場合、日本の戦費調達に支障が生じるのではないか。大義のない第一次世界大戦に突入していった、愚かな国のリーダーはともかく、役人たちの対応に問題はないのか。「煙管」には、煙管（＝藩の象徴）の材料の価値を下げることで、藩の財政が救われたところが描かれている。そこには、国際情勢に対する日本の対応の遅さへの批判が読み取れるのではないかと考える。

おわりに

この論考では、芥川の初期作品「煙管」を、作品発表当時の社会情勢との関係から読み直した。まず、「煙管」に見られる、経済、金（ゴールド）、好景気という要素が、第一次世界大戦下における貨幣制度としての金本位制と日本の好景気を想起させることを指摘した。そして、次の三点の理由から、「三人の役人」の行為を重視する。すなわち、優秀な家臣さえいれば安泰であるという思想が作中にほのめかされている点、「斉広」の暗君ぶりが「三人の役人」の存在を際立たせている点、「宗俊」が主役の役回りからずらされている点である。こうして「三人の役人」の行為を重視し、本作が〈煙管は藩の象徴であるが、役人がその

煙管の材料の価値を下げることで、藩の財政を救った話〉であると捉え直した。それにより、まだ日本が金本位制を中断せず、そのまま続けていた時期に発表された「煙管」には、第一次世界大戦中の日本が「三人の役人」のごとく対応しなかったことへの不信感が読み取れるのではないかと結論づけた。国際情勢に対する日本の対応の遅さへの批判を読み取るのである。

「煙管」という作品の存在について考えると、芥川の作品には、そのごく初期から、政治的意見が作中に落とし込まれているものがあったのではないかと推測することができる。今後は他の初期作品についても考察することで、この問題についてさらに考えていきたい。

注

1）李碩「博士論文 芥川龍之介小説のジャンル研究―小説形式と歴史の関係について」（東京大学学術機関リポジトリ、2017年9月）
https://repository.dl.itc.u-tokyo.ac.jp/?action=repository_action_common_download&item_id=52574&item_no=1&attribute_id=14&file_no=1（参照2020年1月15日）

2）石割透「「煙管」から「貉」へ―作品の停滞―」（『芥川龍之介―初期作品の展開』有精堂出版、1985年、135頁）、山敷和男「主題と方法―『羅生門』から『湖南の扇』まで」（『芥川龍之介の芸術論』現代思想新社、2000年、76頁）、橋本学・藤井伸行「試論・芥川龍之介における“近代”への諍い――大正期知識人の思想と苦悩に関する初歩的考察―」（『広島国際大学医療福祉学科紀要』2009年3月）、WAEL MOHAMED ORABI ABDELMAKSOUD「芥川龍之介「煙管」論―〈内面〉と〈世間〉を中心に―」（『比較文化研究』2018年6月）など。

3）関口安義『芥川龍之介とその時代』（筑摩書房、1999年）、『芥川龍之介の歴史認識』（新日本出版社、2004年）、『芥川龍之介 永遠の求道者』（洋々社、2005年）、『芥川龍之介新論』（翰林書房、2012年）など。

4）芥川が「校正の后に」（『新思潮』1916年11月）で「加州藩の古老に聞いた話を、やはり少し変へて使つた」と書いていることは、諸家の指摘する通りである。

5）高橋亀吉『大正昭和財界変動史 上巻』（東洋経済新報社、1954年、54頁）

6）日本銀行百年史編纂委員会編『日本銀行百年史 第2巻』（日本銀行、1983年、332頁）によると、国民の中には政府が何の手も打っていないことに対し不信感を持っているものもあり、日本銀行もまた政府の対応について心配をしていたが、その頃は様子見をするしかなかったという。

7）綱紀が十村制度を整えたことについて、高橋裕一編『郷土史事典石川県』（昌平社、1980 年、101-103 頁）は「加賀藩の十村制度は、全国的にみてももっとも完成度の高い農村支配制度である」とする。十村制度については、北國新聞社石川県教育委員会編『ふるさと石川の歴史』（北國新聞社出版局、2014 年、77 頁）も参照した。綱紀の人物、加賀八家については、東四柳史明他編『石川県の歴史』（山川出版社、2013 年、194-199 頁）などにも詳しい。綱紀の代に学問・文芸の興隆が顕著であった点も説明する。北國新聞社石川県教育委員会編、前掲書（98 頁）にも綱紀が名君であったことが述べられている。

8）高橋裕一編、前掲書（229-232 頁）は、斉広の政治理念がぶれていたことについて述べる。藩の財政を改善することに熱心であったものの、それが性急であったこと、経費の削減を行うものの、あまりに内容が厳しかったことを指摘し、「施政は苛斂に傾き、人心はしたがわず、それゆえ仕法の成果はあがらなかった」とする。斉広が十村断獄事件の時の藩主であることにも言及する。他に、北國新聞社石川県教育委員会編、前掲書（102-103 頁）を参照した。

9）石川県編『石川県史 第 2 編』（石川県、1939 年、1524-1525 頁）に「山崎勘左衛門」「岩田内蔵之助」（正しくは「内蔵助」）「上木九郎右衛門」の名前が見える。

＊「煙管」の引用は『芥川龍之介全集 第二巻』（岩波書店、1995 年）に拠った。ただし漢字は適宜通行の字体に改め、圏点やルビは省いた。傍線は全て論者の付したものである。

Rereading Akutagawa Ryunosuke's *Kiseru*: A Monetary Policy Perspective

MIZUNO Akiko

Many of the early works by Ryunosuke Akutagawa have been praised for his skillful depiction of human psychology. However, the writer may have implied his political opinions in some of these novels. With this in mind, this article will reread one of his novels, *Kiseru* (*The Pipe*). In the story, Akutagawa depicts three public officials protecting the Kaga domain's finances by making a brass smoking pipe as a substitute for a gold one, which was a symbol of Kaga Hyakumangoku. The purpose of such a depiction was perhaps to criticize the monetary policy adopted by Japanese bureaucrats who maintained the gold standard, contrary to the global trends during World War I. In this article, the author concludes that *Kiseru* is a novel that expresses the writer's worries over Japanese society.